

● いわきの地域包括ケア、いごいでます！

TAKE FREE

vol.7

igoku

紙のいごく
Magazine for Iwaki Masters



特集

igoku Fes 2019



Photo : Joji Suzuki

What is Igoku ?

Igoku is a word which expresses the philosophy of an integrated community care system initiative that started in Iwaki. Igoku is the Iwaki dialect equivalent to the Japanese word "Ugoku", which means "To move". The Igoku initiative provides an expanding range of information and develops various projects in order to help people live healthy, happy and longer lives.

いごくとは、

いわき市でスタートした「地域包括ケア」の取り組みの「理念」を表す言葉。「動く」という言葉のいわき弁。人が健康で、幸せに、より長生きできるように、さまざまな企画、情報発信を展開しています。



遺影の撮影でも「映え」を目指そう



MIDORINOMARU



上三坂やっつき踊り



奇妙礼太郎

igoku Fes 2019

極彩色

ソトフェス

8/31 Sat 平中央公園

紙のいごく、今号は「いごくフェス特集」。
共歓と笑い、その中で光る「極彩色」。
2日間のフェスを渾身レポートします！

写真=鈴木穂蔵 鈴木宇宙



原田茶飯事



↑今回のいごくフェスの裏テーマのひとつが「環境と循環」。循環型の地域づくりを目指そうと、環境デザイナーのオオヤマタカコさんと一緒に「ゴミを極力出さないフェス」をデザインしました。
↓多様な人たちが集うのが本来の祭りの姿です。「スナック極彩色」や「いごく食堂」のブースには、老いも若きも、キッズもシルバーもみんなが自分らしく輝く、そんな「極彩色」の笑顔が咲き乱れていました。



会場の美術は去年に引き続き小池晶子さんが担当

フェスという祝祭の場に引き寄せられた人たちが、そんなつもりはなかったのに家族みんなで棺に入り、思わず死について思いを馳せてしまう。それが巡り巡って今の「生」を照らしてしまう。そんな「エラー」を起こすための様々な工夫が凝らされていました。

初日のソトフェスでは、音楽ステージや食のブースなど一般的なフェスのプログラムに加え、入棺体験の棺や、遺影の撮影ができる「涅槃スタグラム」、んまっポーズによるダンスワークショップなど、死や老いを考えるきっかけをあちこちに展開しつつ、「盆踊り」や「ヤッチキ」など、いわきの伝承芸能ともコラボしました。歌あり踊りありのプログラムを、参加者それぞれが笑顔で自由に楽しむ姿が印象的でした。

一見すると「地域包括ケア」とは何の関わりもないイベントに見えるフェスですが、フェス(祭り)とはそもそも、生者も死者も、老いも若きもだれもが等しく存在できる「共歓と慰霊の場」。つまり、それ自体が地域包括を体現するものです。共に食べ、歌い、遊び、踊りあう時間のなかでこそ、人は人を思い、地域を思い、隣人を感じる。その思いはきっと、フェスの後の日常の暮らしにもつながっていくはず。



地域やご先祖に思いを馳せる盆踊りも大盛況でした



岬はな江と青葉会



革パン刑事



んまっポーズ×いわきFC

ソトフェスのプログラム

Stage

奇妙礼太郎
MIDORINOMARU
原田茶飯事
革パン刑事
上三坂やっつき踊り
岬はな江と青葉会
んまっポーズ×いわきFC

Food

ピア博いわき
bistro antiqua
橋本酒店
ちょうたら
KINKA
bo-shi coffee
あおいちプロジェクト
いごく食堂

Attractions

igokuの環境アクション
スナック極彩色
入棺体験コーナー
涅槃スタグラム
いごく写真館



シニアポートレート撮影会



→株式会社シルバード代表の下河原忠道さんを講師に迎えて繰り広げられた「VR看取り体験会」。誰かを看取るシーンだけでなく、自分が最期を迎えるシーンなど3つの映像を鑑賞し、話し合うことを通じて、看取りとは何なのか、よりよい看取りとはいかなるものかを考えました。下河原さんの熱のこもったお話など、詳しい振り返り記事がウェブのいごくにも掲載されています。



VR看取り体験会



毒蝮三太夫

igoku Fes 2019

水と虹の極彩色

ナカフェス

9/1 Sun いわきアリオス

ふまじめな笑いを經由すると、なぜか死もポジティブに考えられる。
ふまじめとまじめの「あわい」を目指したナカフェス

写真 = 鈴木穂蔵 鈴木宇宙 中村幸稚

2日目のナカフェス。いわきで一番“いごいた”人に贈られる「いごく表彰式」では、93歳の今なお現役の館長として活躍している、みろく沢炭鉱資料館の渡辺為雄館長、そして、いわきに多大な功績を残した故・ケーシー高峰さんの二人に贈られました。演芸ステージでは、3回連続出演のロクデムによる即興喜劇、事故物件住みます芸人の松原タニシさん、そして毒蝮三太夫さんを招いたトークが繰り広げられました。毒蝮さんのトークは、今年、天国へと旅立ったケーシー高峰さんの追悼企画として行われ、笑

いあり涙あり狼談ありの caos な時間となりました。

このほか、VR看取り体験会、シニアポートレート撮影会など体験プログラムも充実。真っ正面から死や老いを考えるのは辛いものです。だからこそ、仮想現実や写真撮影、笑いを媒介に、いろいろな道を辿りながら、みんなで一緒に生きること、老いることを考えてみる。それがナカフェスでした。死や老いを、あえて笑いながら考えてみる。笑った人の数だけ「いかに生きるか」という問いが生まれたはず。



ロクデム



スナックらんと新山ノリロー



松原タニシ



いごく表彰式



ナカフェスのプログラム

Stage

- 毒蝮三太夫
- ケーシー高峰(故人)
- 新山ノリロー
- スナックらん
- ロクデム
- 松原タニシ
- 渡辺為雄(表彰式)
- IBCサクソフォンアンサンブル

Program

- VR看取り体験会
- シニアポートレート撮影会
- MUKUポップアップショップ
- SOCIAL SQUAREブース
- 血管年齢測定
- SONY FIAT
- 入棺体験コーナー
- いごく写真館 ほか



IBCサクソフォンアンサンブル

いごく表彰式では、IBCサクソフォンアンサンブルの皆さんに演奏をして頂きました。息の合った演奏で、受賞者の渡辺為雄さんをお迎えすることができました。←みろく沢炭鉱資料館の渡辺為雄館長。御年93歳。今尚、いわきで炭鉱の歴史、そして文化を伝えようとする姿に、会場の全員が感銘を受けました。

“生きているうちに死んでみる祭り”の爆誕、igoku Fes. そこにある老いと死の持つ巨大な力の転換について。

文 = 鈴木絵美里

あの2日間の記憶を思い出すだけでいつもお彼岸になれるのがigoku Fes.だったなあ、などと考えながら、お彼岸にこの原稿を書いている。今までのお彼岸は、すでに「あちら側」へ渡った祖先との対話でしかなかったが、むしろ、igoku Fes.を終った後の自分は、想像上の「一回死んだ後の自分」みたいな者とも対話を始めている。まだ38歳なのには？ いや、いつでも話し始めてみたほうがいい。早すぎるなんてこともない。ちなみに、つい数日前に会った両親とは延命治療の話をしたりもした。まだ病気でなくて元気に暮らしているのには？ いや、病氣じゃない時、いざという時じゃない平時、にしか話せないことがある。むしろあのigoku Fes.の2日間でガツンとパワフルな体験をさせてもらってから、死についてひとり考えたり身近な人たちとそれを共有するのなんて、もはや防災訓練の如く、日々のこととしてやっておくべきだわ、などと思うようになった。

あのigoku Fes.とは一体何だったのか、もう少し詳しく振り返ってみる。

さまざまな「フェス」が増えてきた昨今、私も、遊びに行くのはもちろん、取材や仕事でフェスに行く機会がどんどん増えている。が、「フェス」自体が随分と商業主義的に消費され始めているような気もしていて、何ともいえない居心地の悪さを感じることも多くなった。まあ、そもそも「フェス」以前に、太古から日本の各地にはあらゆる「祭り」があったわけで、その神事的な要素も含みつつアップデートされたような、祭りの延長上にあるフェス、というのを見てみたくて、最近では大きな都市型のロックフェスなどよりも、よりそれぞれのローカルの地に根ざした小さな村づくりのようなフェスにばかり足を運んでは、祭りを楽しみつつ、文化人類学的に(´・`´)観察をしている。

そうやって、今年もいくつかの小さくも興味深いフェスへと行った。igoku Fes.もそういうもののひとつだった気がするし、でもっといろいろなテーマが混沌としたままそこに置かれていて、結果、何気なく参加した側も五感と己の感情と思考を使い尽くして臨むことになる壮絶な場だったし、はたまた、ただただ休みに少し実家に帰ったらいろんな親族がいていろんなことを言っているのをぼんやり聞いている、というような場でもあった。あれを「フェス」と称していること自体が非常に大らか且つ、よく考えると、巧妙に仕掛けられた実家からの罫」のような雰囲気すらあったと思う(「褒めてます」)。

福島県のいわき市にigokuというWEBと紙雑誌で展開しているメディアがあり、それをいわき市の地域包括ケア推進課が運営しているらしい、内容がなかなか面白いものらしい、ということはSNS上でなんとなく知っており、しかもそこには私の知る仲間も多く関わっており、しかし全容はどういったものなのかわからないまま、今年もigoku Fes.を開催するの来てみないかと声をかけていただいたので、私は8月の終わり、ひとりで行きたくて向かった。

1日目は「ソトフェス」、2日目は「ナカフェス」として構成されており、その名のとおり、ソトフェスはいわきアリオスの横に位置する平中央公園で行われる「野外フェス」、ナカフェスはいわきアリオス内のいくつかのホールを使用して行われた。

ソトフェスでは、10店ほどの美味しい食べ物や飲み物の出店が並び、いわきFCと市内65歳以上の人々によるダンスワークショップの発表からDJ、盆踊り、弾き語りといった演目が夕方から夜

話こそ、ライブで聞くことだけに意味がある。(笑)

死や老いをタブー視せずに、誰もが乗っかりやすいネタにすることにこれだけ賭けているigoku Fes.の執念ともいうべきものの正体とは何か？ というか、そもそも老いや死をタブーとしないことがなぜそこまで重要なのか？ 私なりにずつと考えてみているわけだが。

かつて、死を恐れた時代があった。もちろん今でも、人は死を縁起のよくないものとする。けれど、いくらでも生命を維持できてしまう技術を持った現代においては、むしろ死ねないこと、言うなれば、延命装置としての管だらけになっても死なせてもらえないことが恐ろべきことになってきているのかもしれない。そう、むしろ、簡単には死なせてもらえなくなっている」ことが怖いのかも、とVR看取り体験会に参加しつつ、私はこの日、ハッとして、ソツとした。人は誰もが老いて、いつかはその命を終える。でもそれがある意味、本人の意思(＝遺志)とは別のところでかなり引き伸ばせるようになってしまっている時代、ということだ。だからこそ、生命の自然なプロセスとは何なのかを、死を通して捉え直してみよう、というメッセージを、VR看取り体験会には強く感じたのだと思う。老いも、葬いも、もはや忌避すべきものではなくなっているのかもしれないな、という21世紀的な価値観。これってコペルニクスの転回……(かもしれない)！

「まだ元氣なので」という理由でなかなか親ともいざという時の話ができない。「親にそういうことをちょっとでも言うとか、縁起でもないし怒る」ともVR看取り体験ワークショップを一緒した方のひとは話していた。でも「まだ元氣」から、ある日突然、その時は「はやってくる。そんな時に残される・見送る側の心のよりどころになるのは、これから死を迎える人と、これまでの時間のなかでどれだけ生きること死ぬことについて考え、話していたか、という事実でしかない。もちろんそんなのは綺麗事でもあって、いざ家族がこの世を去るとなったら「もっとうでできたのかも、ああしてあげられたかも」という後悔は尽きないだろう。けれど、たとえ「病氣」でなくとも、老いと死は必ずやってくる。

はて、そうなるど、アンチ・病氣、アンチ・老い」ではなく、すべての生命が迎える道をしなやかに受け入れていくには何が必要なのだろう、という問いも生まれるのだが。それは自らの出店では「あ食堂」と名乗れる態度そのものだし、あるいは棺桶に入ってしまったら、涅槃スタグラムを撮ってみるという行為によって、一見ふざけすぎてる・不謹慎だなんだと批判されかねない無邪気すぎる行為でもって仮にも死を思ってみるところからうっかり軽率に始まる、誰もが自明と思いきぎている「生きること」の意味合いの捉え直しにあるのではないだろうか。

ちなみにだが、私も涅槃スタグラムのフレームで撮影し、その写真データをすぐに「私にもしものことがあったら、この写真を遺影につかってください(笑)」と夫に送っただけで、ひとつ肩の荷が下りたかのごとく、気分が想像以上に楽になったのだから、人間の気持ちなんて全然わからない不思議なものだ。生と地続きである、老いと、死。タブーとされていることを乗り越え、その境界線を曖昧にしてみる。その境界が曖昧になった状態の中にこそ、現代を生きる私たちが捉え直してみるべきポイントがあるのかもしれない。

つまり今は冗談であっても、誰にとっても有限の時間の中で、いつかはその時がやってくる。も

にかけて練り広げられた。公園のなだらかな丘の上には棺桶と葬儀の祭壇に掲げる遺影を模したフォトブース(「涅槃スタグラム」という)が設置されており、この日は誰でも入棺体験(´・`´)ができ、親子連れもたくさんいて、それぞれが笑顔の遺影を気軽にスマホで撮っている、というもはやカオス的なながらもほんわかしたお祭り空間。でも同時に、このくらいタブーを飛び越えた形があつて初めて、人は「禁忌ってなんで禁忌とされているのか」という問いに辿り着けるな……とほっとさせられるのだった。なんたるアートであることよ。

あたりが暗くなるにつれ祭りほとんど白熱し、1日目のソトフェスが終わりを迎える頃ふとああ、これが涅槃の風景みたいなものかもしれない」などとひとり感慨深くなってしまっていた。木の下に作られたステージでは奇妙礼太郎が歌い、小さな子どもたちは間接的な夜のライティングが美しいアリオスの2階から1階へと繋がっている外階段の回路をずつとはしゃぎながら駆け回っている。こんな景色を見たまま眠り、明くる朝に起きようとしたら、あれ死んでいた、みたいな。『死ぬ前の日まで元氣なまま、ある日ぽっくりと逝きたい』という現代において多くの人が持つ願望が現れたような景色を、一瞬あのソトフェスの中に見た気がした。地元の美味しいものと酒と踊りと音楽と家族、暮らしのなかの愛おしいものが揃ったこんな夜、今ならきつと死後の世界へとスムーズに行け(逃げ) そうだなあなどとほろ酔いの頭で、しかも余所者ながらも思ったのだ。……とはいえまあ、なかなか死についてもそう簡単には問屋が卸してくれないのが、現実というもの。

2日目のナカフェスでは、昨晚とは違ってかわって朝の10時より、VR看取り体験に参加。高齢者住宅を運営する株式会社シルバード代表の下河原忠道さんが丁寧にファシリテートしながら、50名ほどの参加者たちと2時間半にわたり、終末期の家族を看取る側としての心の葛藤や、高齢者本人の気持ちをもVRで追体験しつつ、参加者同士でのディスカッションを行っていく。

午後は中劇場というホールの中で、いわき市内でリスベクトに値する方を表彰する表彰式(今回受賞されたのはひろく沢炭鉱資料館を個人で運営する渡辺為雄さん!)に始まり、事故物件住みます芸人松原タニシさんのお話や即興演劇集団「BIG+(ロクデイム)」によるパフォーマンス、そしておばちゃんたちのアイドル・毒蝮三太夫氏までもが登場する公演が練り広げられた。

この午前と午後のコントラストだけでも相当強いのだが、そもそもこの午後の公演を見ればわかる通り、登場人物の振り幅もすごい。私はひとり、かなり圧倒されつつも、最後の「スナックらん」の頃にはただただ爆笑し続けていた。「スナックらん」というのは実在するいわきのスナックで、今年4月に亡くなった、あの医事漫談で有名なケイシー高峰氏の行きつけだったお店なのだろう。その店内を完璧なまでに模したセットに実際のママがやってきて、毒蝮三太夫氏と新山ノリロー氏とで、ケイシーさんの思い出話やぶっちゃけ話に花を咲かす、という展開だったわけだ。ちなみにもう少し説明を加えると、ケイシーさんは昨年のigoku Fes.にも登場、いわきいまま住生されたのではないか、もちろん体調は優れない時期もあっただろうけれど、きつと楽しいまま住生されたのではないか、ということが伺えるわけだが、もしも自分が死んだら、この日の舞台上で展開された「スナック」のように、あれやこれやと楽しく話しつつ献杯してくれたら最高だよな、と感じたひととき。(※内容はあまりにくだらなかつたり下ネタ満載なので書き起こすようなものではない……。こういう

ちろん人の死は哀しい寂しい。けれどもそこに「悔いがあったかどうか」だけが、残された人にももちろん、故人自身にとつても報いとなるはずで、つまり、冒頭に書いた通り、人生のなかで死について話すことに、遅すぎることはあっても「早すぎる」ことは無いのだと思。それは、「いつかは終わるこの有限の時間のなかで、できる限り納得感ある楽しい人生を送りたいと願うことが明日を生きることへの活力に繋がっていくのだ」という人生哲学としての側面を携えつつ、同時に「自然な死って何だろうか、そんなことは可能なのだろうか」という未だ答えの見えない問いと向き合うことにもなる。

さらにもうひとつ付け加えておくと、igoku Fes.に通底する「生きているうちに死んでみよう」というこのコンセプト自体が、ある種の無礼講が許される場としての、祭り・フェスの機能を最大限に使っているように思い、それが非常に興味深かった。(おそらく、「上三坂やっつき踊り」については完全にその無礼講の象徴ともいえるのではないだろうか?)

じつは、そもそも自分も、肉親や自分の死について想像してみること自体を、無意識ながら、かなり恐れていたのかもしれない。いや、誰でも当然そうだと思う。というか、想像ができない(＝想像をしたくない)。けれども、igoku Fes.は、死ぬことや老いすることへの想像力を起動させる装置がひつとりと仕掛けられていて、ひとつひとつを体験していくことで、自ずと「ああ死ぬのもそんなに悪いことでもないのかもなあ」とか「どうせいつかは死ぬのだから、それまでにやりたいことやっておきたいし、日々の暮らしのあり方に満足しておきたいなあ」とか、思い始めるのだ。こうやって地のものを食べて、おいしいねえと思ひ、明日への活力を得る。みんなで輪になって益に踊る。そういう、暮らしの思い出をサルベージしながら、人生の最後を迎えられたらどんなに幸せなことだろうかと、再び1日目ソトフェスのことを思い起こす。そんなループ。

福島から帰ってきて、お彼岸の東京でこの原稿をひたすら書いていたら、「あなたは、何をしているときに生(せい)の喜びを感じますか?」と祖先から問われているような気すらするのだった。「そうだなあ、私の命が喜ぶ時や場所ってどこだろう」とぼんやりと考えると、福島の広くて青い空とか見ている時に、ああこの国は美しいなあと心から感じて呼吸が深くなるし、福島はやっぱり東日本の誇りだなあ、という結論に辿り着きました。今、それ自体はそんなに大それたことでは無いのかもしれないけれど、私が震災前には知らなかった福島の雄大な景色は、この10年弱の間に出会えて一番よかったもののひとつであって、そういう場所であろう「フェス」に参加して、死についてのコペルニクスの転回まで得させてもらった恩は、正直、筆舌に尽くしがたいです。

ちなみにこの「フェス」は、今の段階でどこでも真似できるような代物では決して、無い。なんだからおもしろそう、と思っただ人は是非体験しにいちゃ行くとよいし、福島の懐の深さとその懐の深さの所以となっているさまざまな社会的状況に立ち向かう底力に「回敬意を持ってひれ伏してから」はて、自分たちならどういう表現にするか」とか、そういうことを考えずにはいられなくなると思う。デイスイズ・リスベクト・ザ・パワーオブ・老いと死。

そんなわけでこの先、igoku Fes.がどんなことになっていくのかもまだまだ知りたいし、そうやって打ちのめされながら反作用としての生の活力をも得たいので、私もきつとまたいちゃ行くことと思います。おつかれさまでした！

鈴木絵美里

1981年東京生まれ、神奈川県育ち。広告代理店、出版社にて10年勤務の後、独立。現在は各種媒体で企画・ディレクションおよび執筆に携わる。音楽、映画、テレビ、ラジオなどいろいろ愛好しつつ多くのフェスにも足を運ぶ。最近は激動の関ジャニ∞の動向から目が離せません！

ヤッチキ・グレイト・ダンス・トリップ

平中央公園の芝の上に

かつての熱狂が蘇る

ヤッチキという跳舞

めくるめく七拍の魔法

文 江尻浩二郎



平中央公園の芝生に野良着の一群が現れた。ねじり鉢巻きにわらじ履き、上三坂やっちき踊り保存会の面々である。いつもは自分たちで完結した演舞だが今日は飛び入り自由。ヤッチキ本来の形に近い。いわき市の中心部、平での群舞は実に37年振りである。さらにこの日は特別な趣向として、かつて地元で唄われていた「卑猥な」文句（歌詞）を大いに唄ってもらうことにしていた。

簡単なレクチャーのあと、いよいよヤッチキ踊りである。腰を落とし、縮こまるようにしながら、腕を振り、大きく飛び跳ね、大地を踏み、腰を突き上げる。素朴で力強い動きはかつて多くの研究者を魅了した。あられもない性の文句に大きな笑い此起彼伏。夜の闇と草の匂い。右に左に群衆がうねる。七拍が1セットの踊りは、唄とズレるようでもたすぐにつじつまが合い、その独特のグルーブが踊り手をさらに高揚させていく。

ヤッチキは明治から大正期に九州の炭坑夫が伝えたといわれ、当初は異端の踊りとして排斥されていた。やがて警域カルチャーのメインストリームに顔を出し、各地で熱狂的に踊られるようになる。戦後の性風俗浄化で廃れるが、昭和50年代常磐ハワイアンセンター（現スパ・リゾート・ハワイアンズ）のキャンペーンで大々的に取り上げられ、15もの保存会ができ、市内で一番の目抜き通りで大パレ



ードまで行ったことがある。その後また廃れ、保存会は上三坂だけを残して解散。その文化的価値については否定的な意見も多かったが、紆余曲折を経て県指定重要無形民俗文化財となり再び注目される。以来20年余り、重責を担って活動を続けてきた上三坂保存会であるが、平均年齢が70歳を超え、いよいよ活動の休止を決定。昨年12月芦ノ牧温泉へ旅行し、貯金はすべて使い切った。ヤッチキはその奇妙な歴史に静かに幕を下ろそうとしていたのである。

ではヤッチキとは何だろう。右手と右足が同時に出る「なんば」で、早いテンポで飛び跳ねるのが特徴であるが、厳密にいうとその定義は難しい。ただ各地の共通項として、その文句は眩暈がするほどエロティックだ。上三坂では159もの文句が記録されているが、その性描写は豪放磊落。性器呼称も容赦なく唄いこまれている。ベツヨ、オンコ、ヘコ、チャコ、ペ、マ、マ、サ、サと目が覚めるようだ。

かつて多くの盆踊りは男女の出会いの場であり、無礼講で性を謳歌する場でもあったという。それは閉鎖的なコミュニティにおいて、性の「ある健全さ」を保つための知られざる機能をもっていたかもしれない。そこで唄われていた無数の「卑猥な」文句は、実は全国的にはほとんど記録が残っていない。ヤッチキはその

意味で奇跡的なタイムカプセルであると言っている。上三坂の多くの文句は、それ自体が大変重要な民俗資料なのである。

いごくフェスは「生と死の祭典」を謳っている。「生」とは「生きる」ことであり、そして「生まれる」ことだろう。「生まれる」前には「性」がある。私たちは「性」についても「ふまじめに」笑いながら考えてみたいと思うのだ。新聞や雑誌やテレビやインターネットが無かった時代、人々は性どのように向き合ってきたのか。今よりも狭く閉鎖的だと思われるコミュニティの中で、いかにして「ある健全さ」を保ってきたのか。それに思いをはせることは決して無駄ではないだろう。ヤッチキにはその時代の残り香があり、私たちに少なからぬヒントを与えてくれる。

ソトフェスで私が「卑猥な」文句の解説を始めようとした時、保存会の会長である田子孝雄さんは俄かに不安になったという。この若者たちが受け入れてくれるのだろうか。嫌がられはしないだろうか。しかしそれは杞憂に終わる。オーディエンスはヤッチキの文句に大笑いし、そして嬉々として踊ってくれた。「ちゃんと説明してくれて本当によかった」と孝雄さんは振り返る。休止中であるはずの保存会は、これを機にもう少しだけ存続しそうな気配である。

死者を生き返らせる笑い



霊を笑う芸

不謹慎にも思える行為が

死者との対話を生み

日本の課題を照らし出した

文 小松理虔



事故物件とは、何らかの原因で前の居住者が死亡した物件のことをいう。事件や自死にも関わりがあることから、世の中から「怖い」「気味が悪い」と奇異の目を向けられている。不動産としての価値にも影響するためか、「事故物件」と検索すると様々な情報が出てくるようになった。近年急速に市民権を得ている言葉のひとつだろう。松原タニシは、敢えてそこに暮らし、その暮らしの日々を、録画した動画や写真などでレポートすることを「芸」としている。

番組の企画でやらされる羽目になったそうだが、めげずに住み続けた松原は、毎晩「何か」と出会う。ある日は白い球体、またある日は白く渦を巻く煙のような物体。松原は、ビデオに映された超常現象を、笑いを折り混ぜながらいわきの人たちに紹介していく。昔よくテレビで放映されていた心霊番組のようだが、しかし、それらと違うのは、松原が、その恐怖から逃げるのではなく、むしろその心霊現象に慣れてしまい、霊とコミュニケーションを試みることだった。

印象的だったのが、亡くなった男性の部屋の掃除したエピソード。松原は、とある事故物件の掃除をするこになり、腐敗した布団のそばでエロ本を発見する。そして、そこで亡くなった男性の霊との対話を試みるのだった。松原は尋ねる。「お父さん、こんなエロ本見つかった娘

さんに恥ずかしいんですけど」と。すると、キッチンからガンガン（やめろー）とステレンスを叩く音が聞こえたというのだ！

このエピソードに、会場は大爆笑。死人に口なしとはいえ、非業の死を遂げたかもしれない人をネタにするなんてひどすぎる。ところが会場の人たちは、微笑みをたたえながら、どこかいい顔をしていた。このふざけた対話が、故人を慰ぶことにつながっていることを感じ取ったからかもしれない。松原は、エロ本を通じて男性と向き合い、残された家族もまた、松原を通じて男性と向き合う。悲しい死だったかもしれない。けれど松原が媒介となり、死者と生者の間に橋がかかってくるのだ。

笑いによって死者に人格が与えられ、対話が生まれる。そして、どのような最期を迎えたのだろう、どのような人生を歩んでいったのだろうと次々に思考が生まれていくのだ。面白いことに、松原の芸は、本人はまじめにふざけているのに、結果として「慰霊」というものに出会ってしまうのだ。

思えば、私たちのジジババの時代、すべての家は事故物件だった。誰もが家で最期を迎え、誰かの死が身近にあった。しかしいつしか核家族が増え、医療が急速に発展し、葬祭サービスが充実し、私たちの暮らしから、死は漂白されていっ

た。私たちは勝手に死を避けるべきものとし、「事故物件」や「孤独死」という言葉を発明し、死を、さらに暮らしの周縁に追い込んでいく。

しかし現実には「おひとりさま」が増え、団塊の世代が一気に寿命を迎える「多死社会」に突入している。「事故物件」や「孤独死」は、もはや当たり前のもの。そんな言葉を使い続ければ、日本人のほとんどは、望まない気味の悪い死を迎えることになる。私たちは、死の選択肢を自分たちで狭めてしまっているのかもしれない。

ではどうすれば私たちは日常に「死」や「死者」を取り戻すことができるのだろうか。松原の漫談にヒントがある。それは「想像力」と「笑い」だ。霊なんてないという人もいるだろう。けれどそれでもなお「あるか」とく振る舞ってみる。すると途端に、私たちの見方や行動が変わってしまう。ただ、それにはもう少し突破口が必要かもしれない。そこで必要なのが「笑い」だ。あるかのごとく霊と語り、笑いでこじ開けた隙間から死と向き合い、考える。そういう回路を、松原は凶らずも作ってしまったのだ。笑いとは想像する力。それは「芸」に欠かせないものだろう。松原タニシとは、その意味で、生粋の芸人だと言えるのかもしれない。



それぞれの「いごくフェス」 みんなの声のコーナー



東京都在住 30代
オオヤマタカコさん
環境デザイナー

循環型社会の話をする時に「Close the Loop（＝輪を巡る）」という言葉が出てきます。これまで一直線に考えられていた生産から廃棄のプロセスを、末端をスタートに戻すことで循環させようという考えで、プロセスの輪が小さいほど環境負荷がかからないとされています。それと同じように、老いに関わる周辺環境もループを小さくできるという「いごくフェス」を見ました。地域の食材を食べ、地域の子供から高齢者までが集い、お互いの顔がわかる社会にすることで共助しあう。そこには小さく豊かな循環が作れるはず。人生100年時代と言われる、シリコンバレーの経営者たちは、こぞって長寿と健康に大金をはたいて開発を進めていると先日ある記事で読みました。けれど、本当のあるべき姿はもっとシンプルなお互いにあるのではと、元気に踊るいわきの皆さんを見て考えさせられました。



千葉県在住 40代
小田篤史さん
俳優・ロケタイム所属

ロケタイムとして3回目の出演になる。いごくフェスでの体験を振り返ると、ロケタイムがやってきた即興芝居と重なるものがたくさんあったように思う。人生の最期の最期まで、自分がどう生きるのか？ どう生きたいのか？ 自分が選んでいいということだ。だって自分の人生は、自分が主



宮城県在住 20代
熊澤雅貴さん
東北医科大学薬学部4年

大学でなんとなく教えられた地域包括ケアの概念は「医療者が主体となつて地域の患者を支える」というものでした。いごくフェスに参加して、私自身も地域包括ケアの概念を間違つて認識していたのだと改めて実感しました。本気で地域包括ケアを推進するためには、まず市民の方々に概念を理解してもらうこと、そして地域包括ケアに関わる人達と市民が身近な関係性にあることが重要であると考えます。そのような部分に焦点を当てているいごくフェスは本当に素晴らしいと感じました。フェスを通して「真の地域包括ケア」や普段あまり意識する機会が少ない「死」について真剣に考えることができ、本当に良い機会になったと思っています。今回学んだことを、これからの学生生活、就職活動、そして将



福島県在住 10代
小林穂乃佳さん
高校生

今回のいごくフェスのテーマは「極彩色」。音楽にのつて楽しんだり、ご飯を食べて「美味いいなー」って思ったり、まさに普段の私たちがその「本来の色」だと思って思いましたし、そういう普通の雰囲気ななかで「ああ、入棺体験とかあんなのか。やってみちやうか！」って、生と死を考える世界へ踏み込んでしまう。それがよかったです。生と死というのは、考えたら終着点が見えなくて、「結局死んだら分かんないしなー」って投げ出したくなる時があります。生と死を考えることは、現状からの変化を考えながら、未来ばかり考えしてしまうから、今の瞬間の自分の色をおざなりにしてしまうのかもしれない。生と死を見つめることは、未来のことばかりではなく、今の自分と対話すること。難しく泥沼にはまりそうだけれど少しずつ考えることではないか。今はそう思います。



福島県在住 30代
未永早夏さん
株式会社 代表

「好きじゃないなら別れちゃえば？」口紅をしたママが言い放つ。お客さんの恋愛相談が始まったらしい。「だって好きじゃないんでしょ？」と更にたたみかけるママ。この日「スナック極彩色」のママという大役を仰せつかったのは、娘の袖6歳。幼い娘の言葉にハラハラしながら、私はブーッの横でこっそり見守ることにした。「大きくなったら何になりたいの？」話題は夢の話になっていった。既に大きくなった人が



福島県在住 40代
青木秀雄さん
看護師

看護師とは、赤ちゃんから高齢者、医師や病氣の方、その家族、様々なジェンダー、専門職から地域住民、スピリチュアルなど、すべてのモノを対象にしている職業だと言える。フェスの2日間、ケーシー高峰さんを想い、入棺体験を通して儀礼を学び、ソトフェスで過去の音と未来の音とのつながりを知り、んまつ「ボス」といわきFCの選手からは筋肉との会話を聞き、酒を飲みながら芝生に寝転がり、夜空を眺めて自然と宇宙を感じた。2日間は「なんかかわらないコト」とのコミュニケーションだった。しかし随所に「看護っぽいコト」が散りばめられていて、私にとつては「看護」に向き合う時間にもなった。開催から1ヶ月以上経過しているが、余韻がずっと続いている。



福島県在住 70代
馬目行雄さん
内郷白水町川平区 区長

30年ほど前、電車で興味を持ち始めた息子を抱いて上りの電車に乗った。泉駅で降りて改札を出ると、待合室に水色のロングコートを着た大柄な男性がいた。彼は窓口の駅員と何やら話をしていて、その後ろ姿からは何か近寄りたがたい雰囲気が発せられ、それは私たちの他に誰もいない待合室



福島県在住 30代
大平裕太郎さん
言語聴覚士

「リハビリテーション」を日本語にする、と「全人的復権」という言葉になります。全人的復権とは、（私なりに解釈すると）「あくまで人間らしく」。老いや病氣によってしまったとしても、あるいは、誰しも最期がやってくるといふことに対して、準備をして、「あくまで人間らしく」。仏教では、人間には「生・老・病・死」の4つの苦しみがあると云われていますが、逆に考えてみると、それらで苦しむ存在こそ、まさに人間そのもの。'soul'は、人間の「生老病死」を否定せず、肯定するお祭りだと思っています。私も、この街で「あくまで人間らしく」あることの支援に、いごいでいきたいと思っています。

ケーシー師匠追悼ステージ その日、アリオスは「らん」になった 毒蝮三太夫 × 新山ノリロー × スナック「らん」

ナカフェス最後のプログラムは、ご存知「ママちゃん」こと毒蝮三太夫さんのトークでした。ダンディなベージュのスーツに身を包み、加山雄三の往年の名曲「君といつまでも」を歌って客席のハートをがっちり掴むと、スナックの店内を思わせるステージにゆったりと登場。テレビラジオで聴き慣れたあの声で、ユーモアと毒舌を巧みに織り交ぜながら、ケーシー高峰さんとの思い出話や、客員教授も動いている短大での講義の模様、シルバー世代とのふれあいを語ってくれました。老いたって、車椅子だって、半身麻痺になってしまったって、人生には喜びも楽しみもある。毒蝮さんのトークには、生きることの喜びと前向きな心が込められていました。「皆さん、元気に長生きしてくださいよ」とエールを送られて、しみじみと頷きながら笑顔を浮かべていた観客の姿が印象的でした。

ママちゃんステージ後半は、漫才師の新山ノリローさん、そして、ケーシー師匠が足繁く通った植田町のスナック「らん」のママが登場。実はこの日のステージのセットは、このスナック「らん」を再現したものでした。ケーシー師匠が愛したスナックで、師匠を偲び、思い出を語ろう。そんな思いがあったのです。毒蝮さんがケーシー師匠を「誰からも愛される人だった」と振り返ると、ノリローさんもそれに相槌を打ちながら、ほかの芸人たちもケーシー師匠を高く評価していたことなどを昔懐かしそうに語っていました。

が、しみじみと師匠を偲ぶ時間は最初の数分だけ。

ケーシー師匠から「世界で一番下品な店」と称されたという「らん」のママのトークに火がつき始めます。毒蝮さんが「ケーシーさんはどのくらいの頻度で来ていたの」と聞くと「1週間に10日は来ていた」と会場を笑わせ、震災後、被災地を慰問しに来てくれた穴戸錠さんとケーシー師匠との友情や、二人が「らん」に来店した時のエピソードを猥談まじりに披露するなど、そのユーモアセンス(?)は、大ベテラン芸人の毒蝮さんとノリローさんをたじろがせるほど。それでも何度も「とても紳士的な人だった」と振り返るママ。ケーシー師匠の人格が、3人の語る思い出と笑顔から、色あざやかに浮かび上がってくるようでした。

ステージと観客席の間に壁はありません。観客もスナックの客の一人。ママと客がいて、みんなで昔の思い出を語り、くだらない話で笑い転げる。そして、笑いまくって空っぽになった心に、しみじみと生きる力が湧き出てくる。その空間はアリオス中劇場ではなく、スナック「らん」そのものでした。そして、そういうスナックだからこそ、ケーシー師匠が深く愛したんだろうなあと、思わず師匠のことを偲んでしまう。ステージには、そんな力が溢れていました。自分が死んだあとも、こんな風に友人たちが思い出して笑い転げてくれたら、死ぬのも悪いことばかりじゃないかなあ。こうして「語り続けること」で、人々の心の中に生き続けるということもあるのだから。決して少なくない人たちが、そんなことを感じたに違いありません。



●編集部より追伸
この日の会場のセットを完璧に作り上げてくれたいわきアリオスの皆さん、そして、無茶ぶりにオファーにも快く応じてくださった「らん」のママに厚く御礼申し上げます。毒蝮さんは、週刊誌の連載コラムでもいごくフェスのことを振り返ってくださいました。毒蝮さん、ぜひまたいごくフェスへ遊びにいらしてください！そして、天国に行ってもなお私たちに笑いを届けてくれる我らがケーシー高峰師匠、ほんとうにグラッチェ！

紙のいごく7号
2019年11月1日発行
igoku編集部
編集長：猪狩僚
プロデューサー：渡邊陽一
エディター：小松理處
デザイナー：高木市之助
ビデオグラファー：田村博之
ライター：江尻浩二郎
イベントプランナー：宮本英実
アシスタント：森亮太
発行：いわき市地域包括ケア推進課
印刷：株式会社 植田印刷所



白水の千年を生きる

為雄さんのいごく表彰に寄せて

文 = 江尻浩二郎

謝 辞

この度は誠に貴重な私に、かかる過大な表彰を賜り心より厚く御礼を申し上げます。誠にありがとうございます。私も何時しか高令になつて、今年で九十三歳と五ヶ月になりました。この度の表彰の事は、私の様な老人よりも、もろ若く、未来性の若い人の、後継者の育成に役立って下さると、元は、ご辞退を申し上げたので、心なやます。

この度の受賞者選定委員の方々が、「渡邊さんが、九十年前もなつた。今年で、社会奉仕の志は、私達もこの頃から、手本として学ばせて下さる事で、ぜひ受賞をお願致します」との事で、「親孝順、丈夫な体を手本となさるは」とお言葉を下さり、はとある受賞を頂く事になりました。比喩に有難うございます。

昨年は、平成三年で、大沢炭蔵資料館開館、丁度三十周年と、記念すべき年に、いそがしい劇場とアリオスの方々が、みろくで、白水マッパやアリオスに、下さり、その折に、多くの芸術家の皆さんの、資料館裏の発掘山で、それぞれの作品が展示され、大変賑わいました。

中でも多くの、カシ、運や、晴者のプレゼントを、下さり、発掘山の運達さんは、大変な悦びであったと思えます。私、スタッフさん達に、御礼をこの挨拶と申上げようと思つた。何か日に、熱い、この感謝を、下さり、お返事を申し上げます。

中々、多々の、カシ、運や、晴者のプレゼントを、下さり、発掘山の運達さんは、大変な悦びであったと思えます。私、スタッフさん達に、御礼をこの挨拶と申上げようと思つた。何か日に、熱い、この感謝を、下さり、お返事を申し上げます。

ありがとうございます。

この度は誠に貴重な私に、かかる過大な表彰を賜り心より厚く御礼を申し上げます。誠にありがとうございます。私も何時しか高令になつて、今年で九十三歳と五ヶ月になりました。この度の表彰の事は、私の様な老人よりも、もろ若く、未来性の若い人の、後継者の育成に役立って下さると、元は、ご辞退を申し上げたので、心なやます。

この度の受賞者選定委員の方々が、「渡邊さんが、九十年前もなつた。今年で、社会奉仕の志は、私達もこの頃から、手本として学ばせて下さる事で、ぜひ受賞をお願致します」との事で、「親孝順、丈夫な体を手本となさるは」とお言葉を下さり、はとある受賞を頂く事になりました。比喩に有難うございます。

昨年は、平成三年で、大沢炭蔵資料館開館、丁度三十周年と、記念すべき年に、いそがしい劇場とアリオスの方々が、みろくで、白水マッパやアリオスに、下さり、その折に、多くの芸術家の皆さんの、資料館裏の発掘山で、それぞれの作品が展示され、大変賑わいました。

中でも多くの、カシ、運や、晴者のプレゼントを、下さり、発掘山の運達さんは、大変な悦びであったと思えます。私、スタッフさん達に、御礼をこの挨拶と申上げようと思つた。何か日に、熱い、この感謝を、下さり、お返事を申し上げます。

中々、多々の、カシ、運や、晴者のプレゼントを、下さり、発掘山の運達さんは、大変な悦びであったと思えます。私、スタッフさん達に、御礼をこの挨拶と申上げようと思つた。何か日に、熱い、この感謝を、下さり、お返事を申し上げます。

ありがとうございます。

為雄さん直筆の謝辞全文

(合巻手)

発祥の地に住む者として

渡辺為雄 93歳。大正15年4月1日、片寄平蔵が石炭の露頭を発見した運命の地、白水弥勒沢に生まれる。父は炭蔵の岡仕事(運搬夫)をしていた。人の為になるよう「為雄」と名づけられた。尋常高等小学校を出て旋盤工として働いていたが、昭和19年12月、志願して陸軍少年飛行兵学校へ入隊。10か月後終戦となり、帰郷して炭蔵の仕事に就いた。

「坑内で働く」という父の遺言を守り、最初は捲揚で働いていたが、所帯をもって子どもができ、賃金のいい先山夫となった。やがて石炭産業の衰退を感じ、副業で採卵養鶏に挑戦。先立つものがなく鶏舎は自作した。昭和38年、矢の倉炭礦閉山。その失業保険が切れる頃、なんとか開業にこぎつけた。最盛期には採卵鶏二千羽。今でも近隣の人たちは為雄さんのことを「たまご屋さん」と呼ぶ。

ある日の行商後、図書館で手に取った片寄平蔵の伝記に人生を変える一枚の写真があった。自分が生まれるずっと前の弥勒沢の写真である。「父や母がまだ若

い頃の炭蔵の暮らしの匂いがプーンしてきた」と言う。何か月も手元に置き、細部の細部まで見入った。やがて為雄さんは古写真の収集に乗り出す。卵を売り歩かたたら昔の炭蔵仲間を訪ね歩き、古い写真があればカメラで複写した。

古写真と共に炭蔵用具も集め始めた。玄関や軒先に置いて来客に見せたりしていたが、やがて養鶏を縮小すると空いた鶏舎を見て思いついた。ここを資料館にしてはどうだろう。炭蔵の歴史を伝えるのは「発祥の地に住み、炭蔵に半生を送った者の責務」なのではないか。平成元年11月3日、すべてが手作りの私設資料館「みろく炭蔵資料館」をオープン。年中無休、入場無料。ここにレプリカは一つもない。すべてが本物だ。雑然と並んでいるようだが、その一つ一つに詳細な体験談と解説がつく。その情報量 圧巻であった。

感謝と供養の先に 資料館の館長というのは「霊界と姿婆世界のつなぎ役」なのだと言っている。今の暮らしがあるのは先人たちのお

かげである。特に石炭産業には多くの犠牲があった。度重なる事故で非業の死を遂げた人も多い。それを忘れてはならない。為雄さんのまちづくりとは「まず感謝、そして供養」なのである。

弥勒沢の「地獄」と呼ばれる辺りには「姥捨て」の言い伝えがある。そう遠くないというので一度お言葉に甘えて連れて行ってもらった。為雄さんは子どもの頃、その岩肌を火を焚いた煤の跡を見ることがあり、「姥捨て」は事実だったのではないかと考えている。その場所に昨年、市のアートイベントで多くのカカシが展示されることとなった。旧産炭地の方々が作った生活感あふれるカカシが、木々の間に賑やかに飾られた。後日その話になると、為雄さんは突然言葉に詰まり、目を潤ませた。大勢のカカシさんたちが二泊三日で遊びに来られて、皆さんさぞかし慰められたことだろうと言う。為雄さんの中にはずっと、そこに捨てられた人々の悲しみがあつた。

為雄さんと話していると、「時間」や「人」や「場所」が軽やかに飛躍する。

そのすべてと、為雄さんは一緒に生きていたのだと思う。為雄さんは過去の声を聞いている。そしてまじりこめてしまう。その姿に皆が引き寄せられる。百年後、為雄さんの肉体はもう残らない。しかし為雄さんのような「誰か」はきっとそこにいるだろう。しかもそれは一人ではない。複数だ。そのようにして為雄さんの「いごき」は連鎖と受け継がれていくのだと思う。

白水の千年を生きる

遠く平安の昔、ここ白水に阿彌陀堂を中心とした浄土庭園が築かれた。以来この地は、一木一草ごとくくに仏性のあは「仏の里」である。

江戸末期の白水村は、主だった農家が33戸だったという。弥勒沢には人家がなかった。そこへ山芋掘りに身をやつた片寄平蔵がやって来た。石炭が発見されると急速に開発され、最盛期には弥勒沢だけでも30を越える坑口があつた。少しでも平地があれば長屋が建ち、中小零細炭蔵が日々興亡を繰り返していた。やがて衰退。当時この沢には狭いトロ

ツコ道しもなく、車は上がって来られなかった。一念発起した為雄さんはタガネとツルハシで岩を打ち砕き、自ら道を切り開いてきた。堀には橋を架け、また井戸を掘って近隣の人々に提供した。しかし時流には逆らえない。しだいに人が去り、物は消え、気づけば為雄さんの家一軒だけになってきた。

のちに資料館を構えると、打ち捨てられていた捲揚機を修理し、石炭の露頭を整備した。開館20周年を迎える頃、その価値を認めた行政が動き、幅の広い舗装道路が敷かれることとなった。その道を大型観光バスが上ってくる。為雄さんは万感の思いでそれを見つめた。

為雄さんと話すと、私は為雄さんとともに白水の千年を生活している。そして常磐炭田の栄枯盛衰に翻弄される。いこういて、いこういて、いごき抜く人を称えるのが「いごき表彰」なら、このいごきで為雄さんを差し置き置けにはいない。その「いごき」の先に、まだ生まれぬ多くの「いごき」が見える。為雄さんは未来へと続いている。私ももう、その流れに巻き込まれてしまった者の一人だ。

登壇前に上映された受賞者紹介のVTR。資料館を案内する様子などを追いつながら、先人への思いと、未来の子どもたちへのメッセージが語られている。ラストカットのまっすぐな眼差しが印象的だ。受賞後に謝辞を読み上げる映像も併せ、下のQRコードからぜひ視聴していただきたい。



igokuのYoutubeチャンネル「igoku TV」にて動画公開中!

石炭の露頭が発見された運命の地に、すべてが手作りの資料館がある。



みろく炭蔵資料館館主



満93歳と3か月



大好きなものだから



おき上げ機も本物、その実演は同資料館の日よだ



石炭発見は163年前



登壇前に上映された受賞者紹介のVTR。資料館を案内する様子などを追いつながら、先人への思いと、未来の子どもたちへのメッセージが語られている。ラストカットのまっすぐな眼差しが印象的だ。受賞後に謝辞を読み上げる映像も併せ、下のQRコードからぜひ視聴していただきたい。

向き合うことで分かる自分の色

大切な人と向き合うことで出せる色

写真を通して見える思いの色

様々な思いが交錯する色鮮やかな撮影会の記録

文 瀬谷伸也



いごくフェスにおける、65歳以上の方を対象にした平間至さんによる写真撮影「シニアポートレート撮影会」。終わった直後に素直に感じたのは、今回も参加された方それぞれの思いが撮影会場に広がる、そんな素敵なプログラムだったなあという思いでした。ただ、その思いはあくまでも会場の空気にドップリ浸かった僕個人の感想でしかありません。だから、その思いをカタチにするためにも、できるだけ客観視しながら参加された方の思いも汲み取り振り返れたらなと思います。

まず、モノサシが一つではないことは承知しつつも、シニアルに「シニアポートレート撮影会における成功とは？」の問いに、「いつまでもずつと残したくなる素敵な写真を撮影する」が答えだとすれば、極端な話、平間さんが撮影をする時点で成功が約束されていると思ってしまう。

それは平間さんのこれまでのキャリアだけを根拠にしたものではなく、過去に撮影された「シニアポートレート撮影会」の写真すべてが、その人の思いや魅力に溢れる素敵なものだからです。そして、今回の撮影でもそうですが、限られた時間の中で平間さんが、参加された方と真剣に、それでいてユーモラスに向き合うその思いが伝播していき、一方通行ではなくカメラマンと撮影される方とのセッションのようなカタチで、自然と素敵な

写真となっていく感じでした。そしてもう一つ、写真とは違い目には見えないもの。撮影の時間そのものを参加者の方がどう感じているか気になるところですが、今回、参加者の方が次に撮影される方に「とても楽しくて、いい時間でしたよ」と声をかけている場面に遭遇し、本当にこのプログラムの思いが凝縮されているな、と感じました。

これだけポジティブな空気に溢れているプログラムは、自然と前のめりになってしまい、客観視は難しいかもしれませんが、だから客観視して評価しようなどと無粋なことはせず、ただただ、目の前で起きたことと自分の思いに素直になって振り返ってみると、今回お一人での撮影と合わせて、ご家族や友人等、大切な方とお二人での撮影も行われたのですが、その中で強く印象に残っているのは、お孫さんと二人での撮影で思わず涙ぐまれたり、ご夫婦での撮影でこらえきれず涙する奥様だったり、ご自身の感情が溢れるような場面でした。ただ素敵な写真を撮影するだけの撮影会ではなく、参加されている方がこの撮影を通して自分自身や大切なご家族とも向きあっているんだ、そう思わずにはいられない撮影会になりました。自然とそう思えたのも、撮影後に平間さんが「しっかりと向き合ってください」と言われていたことが大き

な要因なんだと思います。

この「シニアポートレート撮影会」は写真を撮影すること自体が目的となっていて、用途は参加者に委ねられています。撮影を意識する方もいれば、ご自身の今をカタチにしておきたい、など。その適度な余白がご自身やご家族と向き合うきっかけになっているのだと思います。

その結果、衣装どうしようかずと直前まで悩まれた方や、前日はほとんど眠れず撮影の間も終始緊張してしまったりした方もいました。もしかしたら少し後悔しているかもしれません。でも、それすらご自身と向き合った素敵な思い出となるでしょう。

だから、出来上がった写真は、誰かの作品ではなく、撮影する側、撮影される側、そんな境界なんてない、あの日あの場所にいた全員が素敵な思いに対する、チョットしたご褒美なのかもしれません。

今回で3回目になりますが、一人一人しっかりと向き合って、その方の人生を受け止めてあげることが自分の中でテーマとしています。

短い撮影時間ではありますが、皆さんの生き様、魅力、優しさを引き出したのではないかと考えております。

平間至



大平かつ子(87) 昭和6年生まれ。いわき市小名浜在住。趣味はターゲットバードゴルフ。